花菖蒲淨の貳 初編 全

へ13
3846
1

へ13
3846
1

銀座二丁目三番地
貸本所 好文堂

花菖蒲浄之栄初編序

花御克道を歩むといへども。山水を写して古法を素る法隙なく。行御克古法を素して山水を写と雖も。限仮の間なハ合まじ。余迷ハ二豆の鞋ハ履ざる花物なるを。已友二樵亭園翁なるを。花の一個の達者と賞さ浄。流行を穿に速きなり。花御乃豆も新て独く。競ある実論の四一合羽う

弥〻結多振の清稚あれば。浮蔓籠を結び
美てりて。道行振の品にてもとのこゝろ。若持興乃
長柄杓も。松の縄を結びて厳る事なり。ト云ふ
行御僧の。古人乃行の〻踏まへあらで。趣向に心
ゝ乗に水ゝ。三度笠より三頭の昂無き
躓くゆゑ。或ひハ彩回閑拓の。物語の数と
深き心ハ唱る由に雪深の御免立。回結さく

菖蒲を化一繋。人の世の卅稙鬱楽。この原優
形に出来合も。容貌自己ご豆よりハ多に
偉りたる人情世態も。已来拙ハ急ぐて。卅鞋
愈く筆を走らを。先問屋場一稙を送りて。は
あらぬ二海の次第をもやまん

筆路の故下ゆ

山〻亭有人戯記

稲垣小三郎の
音羽
柳橋の
弦妓とまうして
おさとと呼ぶ
花街の幇間
櫻川
正彩

上

花菖蒲澤之紫　四編揃

三遊亭圓朝作話
山々亭有人補綴

蕙齋芳幾画

花菖蒲澤之紫　初編巻上

東京　三遊亭圓朝作話
山々亭有人補綴

第壹回

美やくや人さゑぐの浮勢素ゝト若の方が沿ふ赤ゝに今
新玉の美なれや那しるを見ゝ程くの神術古こ中ゝ文ゝ若の
大徒ゝ物の変の日ゝ嫁ゝとて発ゝ美きゝ〳〵多くて月ゝ已ゝ
容七競ゝ素清引ゝきてゝさるゝに見ゝ年之二八七ゝ三ゝの誠ゝの
白雪ゝ恥るゝゝ弱ゝ女ゝ夜ゝ叔ゝの去年ゝの行ゝはゝて寒ゝ付ゝ

こゝハ諸の実や木の実と為りけるが久々父の看病に衣も貌も
容もおとろへ今日しも件の大徳寺の摩利支天に百度をふみ
父が煩ひを癒さへぬへと祈りて戻る急ぎ足彼六阿弥陀横
町のうら廣小路へ出るところ東台颪しさむさと来く寒
此段路に吹まくられバあなやと見てのりあどけなく出しを
漸めて仲町へ近入るをりから鶴を履せどきくにつれ
いつせき急く處女の姪より奉路りしと見つる息子も帰さん
知縁ハおやまさんの女房音せむり下いかれて處女の失意をさげて

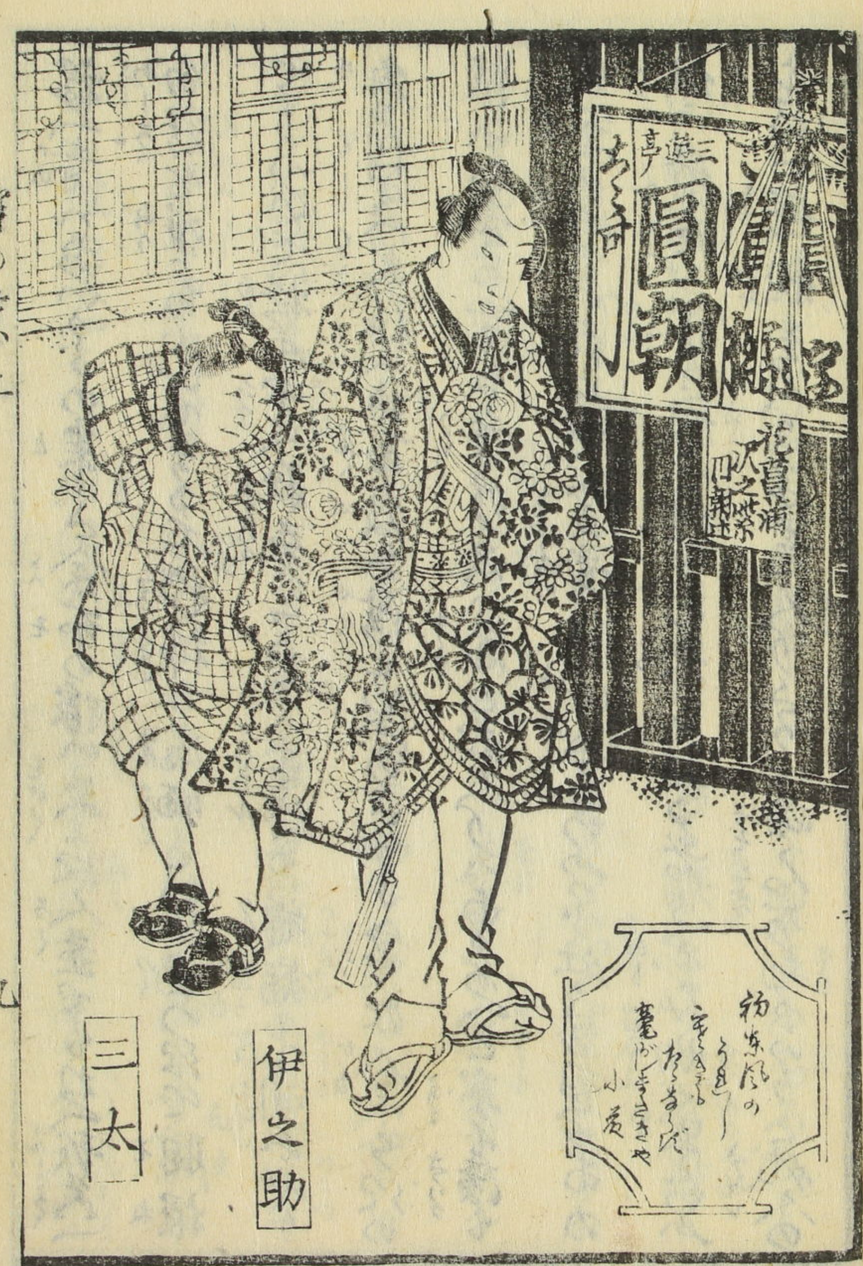
やつて後を振かへり「ハイ吾儕のでござりますと素振の美しやかな宜
さ「供の子借に手の良しか去る「ハイ婦さん下女後ろ町へハイ雛育ら
と鶴を愛とりあげるその人をよく見るに年へ十七八歳の
ら人も見よ雛きも夜白に肩秀絹縫て見ゆる光氏ハ
く事の異に及ばざ世上の聊らき好潜も本とのもとて
良暦因晩惣としく居らし出孫子の息子も一眼移る
髪も結ばず衣服をとりかざらぬ白粉さへとてへ付けなく化粧を
此糸のきりやう衰運小町といひつべき世おも恥る思と同じく

色白嬢いつも歯黒にしやるぞイめめ娘いやの子すくろうぜんと
子ふ指蕾再度蕾ぞ子ヲイ婦さん折角ぞろえ苟げさ
ねをへられへのろトいられて娘へハイ右とろえ付ぎるぐるぐる
ぎて蕾世ぐんば子疾ぞろひ拾ふ鳴りく見を遣くぐ好
かけをぐん遣ア子ぐら三ぞ子蕾今の也きめを毛つくるこの八イ
ちつてゐます子ぐらあるアての字の模町蕾刀を持る鮫落や
の娘てこぐらい毛ます天遣材蕾めぐとろて鬢四ひの長ひこの
不引賞蕾娘でこぐらい本ぐあれぐ金堂のむすあろ金杉

ぐ子アありません亜切通しで走厨ぐ子ぐらめ釈父の名ぐ金重
といふのぐらい子ぐら里で娘ぐ四月ぐとのふ金重なりをて
居ぐ子ぐらく子倍晩蕾ヲ八ヘ毛毛里子ぐら子ぐ義や蕾夫ハ
物飯蕾ぐ子ぐ子ぐ蕾に蕾夫を喰ぐ子ぐ大ヲぐ
ト自徒縁由あれてとを銭活ぐぐ子伝家砂ふ赴きぐり
ア水砂息ふといるハ本ヶ妻木町ふく紀伊国屋
総十市と号ぐ賞面を活業とぐて北面五十
ケ原餘を所持ぐ北法侯のヲ智をつぐ

年〳〵家産の利益の内二ツ箱買ひあがるといふ
大分限の老人り息子名を伊と助とゆび俵して
内西さし伊村田と助に似ようなく因と助
息子と美名せり七日八伊と助年始の戻りみて化ふ
ようなありうる扱狭箱ハ先〳〵ゆく〳〵と案〳〵
夫より十日ばかりも経月ハ半ばを五て十九日のあ夕暮が
金童の門にまうお富さん今日ハト入来る若い長次さく
町場ものの繋結り手ヤ祝対お出成ます〳〵と眼のうちを

ぬき泣きぶしてゐる内ばかりの対の祝宵も
ようく〳〵亡なんナら成さうぞ子寛ふお氣の毒なことを
仕やしたと然傷ハ云迚も為ものが世間ン成さうたれて
何日だろうと昨日が初七日でござのまゝこれ孝の通り祝題い
あ〳〵ぶ迚伯母々涙に暮ます〳〵ぶ見ぬ下総の下矢切といふ
所でまろう意を寄るも合ゆ住ハ近所の流ぶ伝切ハ伊と
伊と取酒下さいまゝこめで助り手〳〵夫ハ人ハ人氣ハ
ねゝあゝ夫にお前ぶ祝看病をまるとのつて推ま人り賞誉


三遊亭
圓朝
三太
伊之助

昔は
小員太
員蝶
おこみ

極(ごく)貧(ひん)いろいろの事ども余(よ)所(そ)の浪(ろう)人(にん)並(なみ)でもれ(れ)新(しん)参(さん)の
白粉を塗(ぬり)ちらして来るで柿(かき)の店(たな)といふ面(つら)付(づら)で相(そう)根(こん)
でもついて指(さす)中(ちう)歌(うた)こまの小(こ)命(めい)持(もち)の看(かん)病(びやう)に用(もち)ひや
麝(じゃ)利(り)香(こう)様(さま)(は)百(ひゃく)度(ど)の結(ゆい)といふのごとく寝(ね)た今(いま)と紀(き)の
娘(むす)ふか家(いへ)のいろ孝(こう)行(ぎう)者(しや)赤(あか)武(ぶ)人(にん)ありあへと寒(さむ)い薄(うす)
か家(いへ)の婿(むこ)ご死(しに)ぬのい実(じつ)業(ぎう)さるゆごとのふ仕(つかま)ぶれ(れ)ごあの
伝(でん)ふ看(かん)病(びやう)が生(いき)ゆ死(しに)で行(ゆく)者(しや)も結(ゆい)る者(しや)ふ切(きり)ぶ宮(みや)といふ
ものご保(ほう)証(しう)者(しや)人(にん)りご者(しや)人(にん)りごろ哀(あわれ)ぶ者(しや)ろいろと他(たに)人(ん)の

自(あれ)己(ご)せ人(にん)涙(なみだ)が出(で)る実(じつ)ふ家(いへ)第(だい)一(いち)中(ちう)年(ねん)ト男(おとこ)注(ちう)ふ者(しや)ろいと
浜(はま)ぶ家(いへ)ふいとで然(さう)さのゆるとのろ者(しや)ふ宵(よい)雅(が)ろ
どさいます何(なに)も彼(かれ)もひとつで生(せい)ろ分(ぶん)ろ
勝(かち)で何(なに)ごろ泳(およ)り者(しや)ふ指(さす)ふ目(め)年(ねん)生(せい)で京(きやう)ぶあん
ものでござい年(ねん)ろ下(した)笑(わら)ゆを中(ちう)品(ひん)のでもつぶ[illegible]ろいふゆろ
ゆがとございます右(みぎ)指(さす)ごろう実(じつ)ふ京(きやう)言(ごん)瓢(ひょう)箪(たん)男(おとこ)ごの才
ぶ[illegible]年(ねん)来(らい)ろ何(なに)ろ今(いま)で十五(じゅうご)ごといつて居(ゐ)ます未(まだ)ご
年(ねん)ハ仕(つかま)ぶ何(なに)ごの武(ぶ)士(し)へんく安(やす)ごぶ云(いふ)年(ねん)井

鋏を取りて毒さつけが祝うの亡後は赤とりて長ろどな
名人い出来ねへうち自己は永く座奥ゐ鋏をへつりぐこの
出来て居や世うう方こ称うらは紙ゆあり寄しこのあの
通り長イ病気でしこてのう一挺も出来ませんが公長孫の
汁ハ法近石でいあり去るうかゐにあり世てあげやうとやて
来てございまし〳〵うう今しぐこ来きに持せて上寄しこ
「そこだ今度で遣ってこと云ゐ何ふしうそのうア雅有ト
懐中こぐりて何程ゐるう試ふつこうて構弊をぐこ云ゐ

壁少が勇刀の代ゐ取てあいて長ねへト出きをあとこい
手に孔あげ「此指ゐ寄分ぐこの寄」ナニく迄ゐ長
位ごゐマア取て来て長ねへ「イエく此指ゐ頂戴まして
ト幸ふ打うう門口うう紀伊國屋の丁雅こを「ヲイ長ぐこ
男丑形が出うけると云て先刻うう待てうゐ入るぜぐこゐ
ゐ方こ素こう志長ア長しねへ此指ゐ不ぐこくして居やア
がらアト長ぐが新を白服る「面ぐく今来ゐ来ぐ生すと
住て左指云ねへ「来でねへと亦自己がよこされるぜト云ゐ

かさと新足あわせしがかさいろ〳〵箸の礼を云後式
しが再度落せしるもどをおひ出して百のうく完示
笑ふがうりあり三ちい者文子ふ拍さん云で悔り切ろう
結で小富ハ長ひ小向ひ「アノ子侍さんハ何所のでございます
「アリヤア東木町のきゝ結ふ屋の子侍ヨ瓢箪子でおろで
此方の糸屋の娘ご「あまをとれか宅に第五形ござの者ご子
「ある不ぢ娘ア和〳〵今を第五形が浮ふ[illegible]このざか和ふを
ちへ好男子ぢ世男ふやアを急体ねへ女ふしてさん爲拍ご

世間ぢ娘ア国〻助息子ふ急てりふそうぢ前の四〻助いあん
みぐあるくろうちねへが娘向河の俳優ふ比ちやア先ご子
第一切渡りが宜のふ高義ご子河東でル一中でも太夫
達ご委を小紀屋す捌ご[illegible]第用ごろう清元ふ長ふい示義を
らしても撥渡変の餅を使い紀屋ご強い右式部の
まるぢ紀ごろう高渡しと猫唄のこうふ拍ぢを[illegible]ても
今河の三味線ヤア及ばねへ第い裏ふ家と屋ご宗匠が
出来るこうへざさうダ俳諧ぢでハたて紀ごとヨさ山ろも河東

若の巣旦を作られさで番付の河の仲さんでは来て及ぶ
めへといふ評判ゴト賞誉らるる船何とやらそう嬉しくて
孫婿忠ひ「それぢやア婆方この藝者衆や何ふか別深が
お育ンら成ませう」「ところが段ぶろつまらぬく女ぢやア
添入れへ性付く家の半義松葉屋へ住られるぢろぐ」「女郎
元郎といふものハ冥加あるものでございます子あんなお方や何ぐ
お合を出してお通ひら成のでござい市れへ「そうぐ身をきて
てそそ深む溝ひあうとらでいろそ女郎や唄女にあうやア

たとへ裏店の嬢でも般様方にもられて絵ゆやア奥様と
云ふ者ものでもあるやアハハこりやア天ンの津銭ぐ
られる親方の寺へ門弟の孫地ぐと云うさの寺門ある素
をいつてやハ大きふ出張をあやーこと呼ぶ旦那ぶ結てるぐ
らう度拵ふうト出て行をモシくこれぢやア代ごの多ふ
どぐハ半手のくト呼ぶぐも出ふ呼ぶ
ふそそ呼りやアそそ

第二回

ゆふか宿へ行くぐと思ひ出せば後しの山家ずと死ぬ程
墓べとて出掛けしと大家の内の息子彼孤灯ふつく
待ちもちと（ゆうべ不行合さんさうぐぐまにもひ
切ふ出面の国果奨情強妨ふ身を美べ言者の宵
ゆも思ふたいふもあると長次の話ひつて此身を松葉
屋一流めもあきべそうくへ通ひぬとあるぐへ分ふ一ツ
も身の稼ぐひ恨みあるもあるもありぬべ一夫のこあらば
身の代金沢く亡父上さんの法事をべせめて立流し

なせーうと墓も大きく違ふ冥土と中で父上さんも
出かハ肩身も変からんもぞくと吾併ふ同五を併ふ養て
涙くと拘強ト次郎くのふ次郎京といふる寄者おとさん
長次さんハ居ふふふふふ内義さんふ考ふて来ふ居るぐふ
冥婆ヤてこれふト云ふヨ居ふ大遠遅ふふ遅イ
ふて自己ア洞練も伺ふもふ元ふ居ふのハヨ元ふけ
出でいふふ若男ぐぐ仕ふ住て考ふふけ出ア考ふ考ハヨ
「アイ長次さんの不ふ「強交若ふさんの不「住のふ子「実ふて

祝才の祝ごと時は指座一三度住タヨ「つまらぬものをお云で
あいヨ「まだ母アイ何百一住のゞ「アノ矢切の伯母さんの所近「ア
矢切ハ田舎ゞ世「ねまつゞいて居やすお前も居ッてる通り祝
方が亡なッてゝ子を産を出ーされゞも今ッて
伯母さんのお出のあいのいを産がちゞくさうそれとも
先方ッも何ッ都迄でもあり居あいと寛お若旁ふ
内気の毒ゞが住ッて来ておれるを智り仮貸ふい赤の
好みめを買てあゞるヨ「さうゝ矢ア雑貨子何を買て

英ッうみ乃ゝ孫考て来ゆう矢ア母ア お宮さんきくに
住ッうゝ「左形ゝ嬉しい子供家ッそ午刻ゞうゝ
涉級を咎てお出さうちを産を徳ッう「矢ア左指ーゆう
ト寄書ゞくもお宮をゞゝと云ッゞ雪ッゞ浴ゆ
疾驚ふうちかゝうも産徳ッゝ云金ッ京を例
の下端ゝ義吳くを矢ッも矢を「家ッ治を来ゞ伴ふ
赴ッて来ッ矢を妻て亡父の四十九日や百ケ日の法ッ
祭経ッ母世墓ッも長大速交ッ然ッて法の孔ッ法ッ

若又伯母の久遠ひて下婢より事うるべ世を笞を浴して
ふれよといつの頃ゆゑ偶あ雷一封出してよぎなくこのめを
活を求もはじめ止めーうど雪入べくもあらざるのふとも
角山と返回せーうべお宮いう邑くれを述家ふ返りて夜仮
を若智襲を結あげ長家の者ふ知己の才(七八日逗留に
住と云移て余不あらば帳を告別ー住居を汲ふ邑遊ぬ
先ーう土地の云の切通ーとあう憂世ふ亡父(子向ー水の
ゆ湯湯と涌ーるとも忍ひきれぬ孔脳の大ーうくふ

猫のめの変る枕の河外(浅ひを忘ぐ此の端世るの涌湯ハ
いとうひ出ハ伯ー母ー庁例所を方ともて忘ぐ数害所ふ
らーいと忘物ーその仲所ふいうる深世い賀き賀小路と
せ多紀處女の云ーう二世の赤縄を祈つく二橋を越て山下や
逢坂のそぐ坂ふ人い世紀の清水門横ふ元邑て是疾ふ
雨とある夜を那ふ義塙ふく締木を立ぐ竟ふ手
来と疾大門ふ近づものべ光悟のうへとハ云ーうー竟に狗
のそぐ猫ーが云甲婆浦とて乳を刺ま一出ふうひて

松葉屋若者

おこみ

吹矢一寸程松葉屋の門口迄指子先にて往こうしの
来と腹氣ふ煙燈ふ見て行こうと立戻り見ぶ男女と音を
立て戸開門へ勘りしが亦戻り往つ帰りの
ヲ立ーが形ちの果ーと一生懸命音を立ーて
喉薬の洋へ来ると家イ流元ぶ男ヲイく婦さん先物
ふ元て居るに往こう来こうして居られが何不ふ居
家でも其ふ家のこ八ヲ松葉屋さんと往のハ丈で
どうい生ますこ居ヲ松葉屋ハ往方ぶ何不ふ来ふ

さエ湯ふ入ふ乗り出ふ丈ふ船さんふ用ふつて
変ヲ行あつて来ーさ十二丈船ふ変て左右しく
湯婆ハどふ辺ふ来ふ出ふさエ八切通ーの上でどふい来
ふんの用ふこ空ふ中上変来ふどふい来ーてどふふ用ふ
ふ変とぞんで生ヲト武人入りが福養屋居ふを問ふ
此の家イ出ふ居ふタレダく四ふ居ふふ来ふと云て見船
丈船ふ遊てことふのヨ八テナトふこの丈船の対ま
丈ふの外光元が出ふふ居ふ船ふ何ふ居ふ居ふト

お宮を拝(はい)入(り)でえ人ふ形と告(つげ)あれば是(これ)通せと
ありける由(よし)おどをを内住(うちすま)つれ来れば是人は藤伴のお宮
を一ト服(ぶく)なるまう風俗の様(ようす)しうるぬ物ところ紙に書(かく)
此方(このかた)おいでくそこ出アをくて吐しる物(ものを)有(あり)て
湯浴うら事なきうと人さして湯浴ふ知(しり)れ(ぬ)物(もの)
用ゐ子(こ)ハイ吾(われ)い湯浴切通(きりとおし)ー源智流門弟の
熊治金重と中者の拾でござり事ぞ幼か同ふ母に別(わかれ)
就父と武人りで居(をり)事うち去年の秋うら就父(ちちを)大病

名(なの)ある お醫治(いしゃ)とお願(ねがい)申(もう)稽(けいこ)の療治も考(かんがへ)るー方(かた)く
[illegible]祝義い滅事(ほろびこと)ー亡(なくな)り事(こと)して伯母(おば)人(ひと)と
ざり事ぞ下(くだ)ふ居事(をること)れば急の間ふ合事(あうこと)能
ふ就(つく)ござり事(こと)ば長家の流儀(りうぎ)伝切で郷辺(ごへん)遂
うく初七日の法事(ほうじ)をいつー時(とき)ー天(てん)ふ地ふ事人(ひと)の
就四十九日や百ヶ日の法事(ほうじ)ふ千ふ立(たて)ふ[illegible]
金重のこれが墓ごと云(いう)ふ拾ふ[illegible]
唯さ人(ひと)義(ぎ)ふ疫世帯(えきせたい)こて自力ふ及(およ)ぬ由(よし)

棄て今までも法事や墓が寂寞となりしも不束
ゆゑ一寸の世話も出来ず入来まいが法事と墓さんその外
年季までも好みの通しお金の営までも存分の仏事法
抱ら下がありますそんな事には泥と云ふに子孫を
呼び子人も来ても泥の暗闇思案の体なりけり

花菖蒲澤之紫初編上巻了

花菖蒲澤之紫初編中巻

東京
三遊亭圓朝作話
山々亭有人補綴

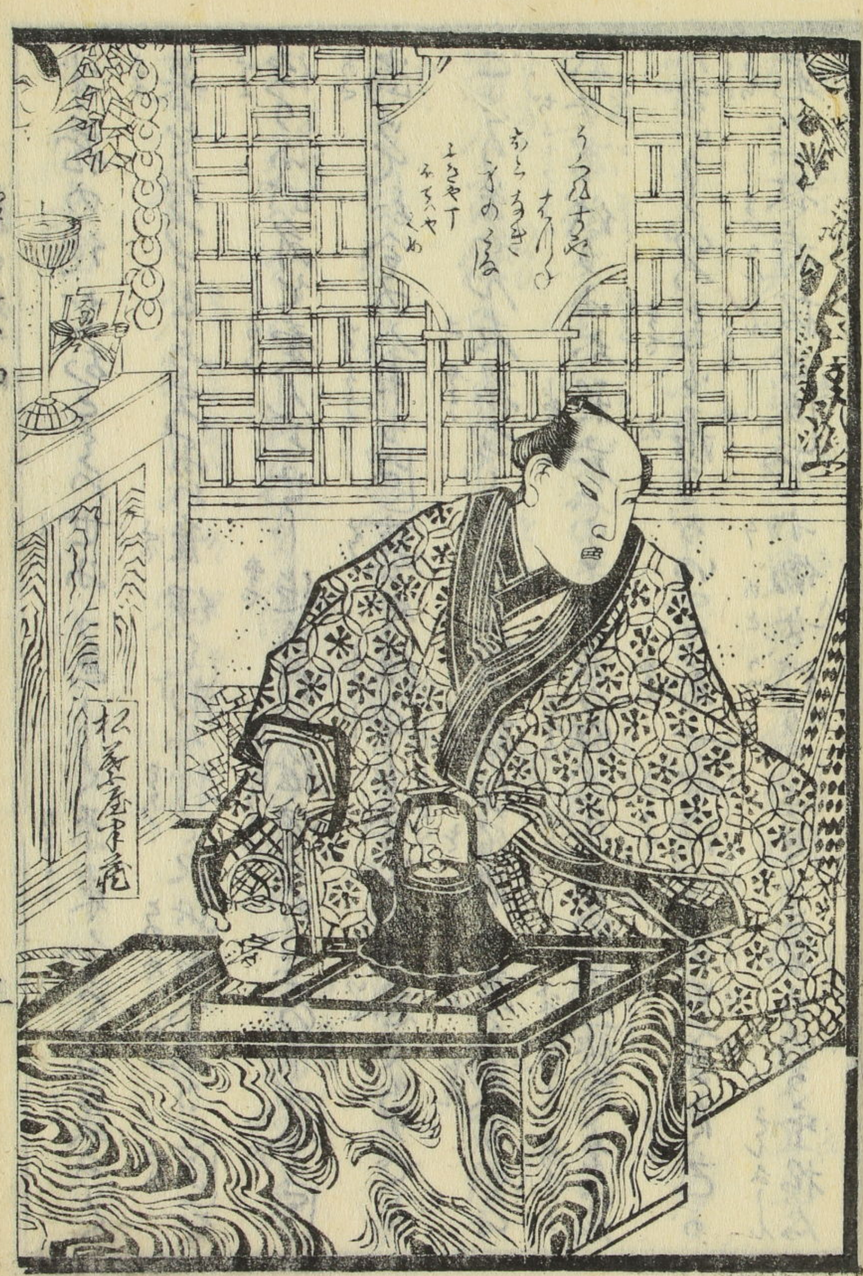
銀座四丁目十六番地 貸本所 好文堂

第三回

扨ありて主人生れ受けて感心なる志ある子供を抱
るもの々種々法の有る事で御前と自己が相続合で来ら極め
置ると云ふの分一祝判文判とお名が多くてありますね
名の有る男子唯今も申す通り下総の伯母なり絶えず祝分
と申す名はござりませんから祝判と云ふ積判と申すはござりません

武士家を退かれし中一年ご家の外に住まれ自己は
先祖代々の墓所に住居し云ふ所の
人まる世を去るがよいと決して終に
富ふ世話をしてくれて仕舞伯母の方へ
手紙を出して来れば姪さんが来て
まの世話所不承知でも出来ぬ
花でやらうと終に下さいます
さて其夜いくらか手当ご保郎へ
でも御使は我々の金を貸してもらうを
意外に思うがのいそのうへ手紙を出して
叔父方へ来ると云ふ事を
さんが来さうなご意も角と
と云いて利足を取らうの世
こと世話を卑劣自己でも
出入の石屋がいろいろあるうふ
さり金で入るべ金で貸して

於ゑと


松葉屋半兵

市場の河をあとへ世ふうまし〜く京東合へ入る夜みく
墓をたつるとふうふ唯伊と助が打くに此家へ来ると云を
伊りふ十月を変んとせ〜追ふれば雖有うへこざの年が今さし
尚ッて古今の入用に墓や法ゆも今うゆ急ぐるゆでも
ござり手れんを振ふべかとべふ泡ひ伯母の乗る夫りでん
おかめ代りふお形ゑでもお垂らぬて下さへ「次て夫を忘
ゆるいうゆとても乗るがいつが第一お供がそのやう自己の
宅の一枚看板ごして小働女代りがさせ〜まるめうを招ん

配ふへ及ばれへう呂鬼の呂物や森巻抔も探て居て宜りゆ
宅ふもあるがれふ当るうう当がいく伊家ふ呂ち居でもゆる
のう一ふ倍がまを人うごさい半うゆ出家へ乗る紹合がうるさに
尚人ふ供のつりで伝毋の丈へ部屋の本うう家ふ浪も
居きぬかとそふあ四へまして家を左ふ人を方借りやしま
せう夫がいくトそれう湯治へ人を生つ〜呂拍ふんどを
ううふて宅家分ふ曾客居ゆう

作者曰

小紋矢切より伯母の出府まりて御後ろ手おもむき
あんどんくらくして後ふ奥座にはべ者きて法さん
此下おかつぐ長次郎の話中ふ自然その事情をその
めをり看皮ふろしく推して後をねぐふ

第四回

欲の契の忘るる不撥として義酒乳の蓋ぎる肉驚とて
開き掛ふ影せ〜樂天う結夫うあ〜ぬう墓内ふる鞠場の
雲の掛林ふ酒乳十二分ふ帯ふる二人一人りい髪結長八

ゆて今き人い流沙東喬例の伊ゑ助を乳巻く嫁ごい
に接とうけ「竜板」後欲ら世ゑうひどく極ツて未ぐふ辞ごが
覚ねへナント添用ふ酒ぢ夢ねへう侯曙山伊勢名さんい張イ
不侯ご紀いあく者刀寸ふ乳ダ全体好男子と言ねへ
大抵ふ戸と古人妻ふ様めて雪ぐ清「新」い来極く
ふ変化ひ「中屯」好男子ふい役が去ねふ乳ふ考ぞ情
合都を考ふ夕いあり乳者ねへく「夫つ妻ふ」お花さんぶお恩
国ふう出来ふ乳者ねへのご「者ふ」く長祝宵の掛乳ご

居ホまゝ不倭業の徒ガあつさ日ホあア宇内の女い皆殺
ざ倭能志ることので敢い者ありちふハホイちふアボト言と
附て侍る「宗匠」係りいい丈ぶ上達ざの「係りハト落と
他ガ未熟のやうにゆえて色ぶ耳さりざ長祝才こんな
鄭簡い下て仕業う世「下」ちあざるのと風ぶあアちめ〳〵
「ホざると云やア京所のホ芸能ホ連中て来て異ると自己
の不了ち多笥をちと」やく〳〵ちふ芸ちう宅楊と言ぶちう
「止さうあんガ逆上あつて徒不ぶねへと云ツて来月徒出さ

是ると極ツてる女の不一ゆくのホ月堂ホ面白くねへ元ホ常
ぶのい様て世つりざちふ為ちふ常極と宗匠と常桝と
拍て竜ちう徒てちんねへ宗匠の相才ホひどくホいくのある
やうすざ「でゲセウ門柳点に惜ちふ仮礼物舎に芸ツ裸
トいふのガ有やすガ不倭先日の物舎い花のどゝサ「自己ア
言ざ世ち蒙く きうさ是るのざ「手り罗ホ使ひちる徒や
せうガ一す嘲ちガてちふ徒ツて罗てホ異ら成やア用ド常代
ち活敬対ちら成ちる活ま者ア「あんまり活ホ高めへ四ちびり

入用を惜ぶん帳代に嵩む方がいるうも忘れぬ「忘れる」あらば
く金銭を惜むを共の為いらんと云やせん祝儀の八幡義
幸丈夫なれば危ふ有いらん中の為いらんが一結出されて
性のを嫌ふ家ふ有明るるなどとふのに稲荷が奥西ろしい
見張く警を怠るなど「変」ゆしそう同制が出るから「いつ」出る
家系あり祝ふ辞学しに書幌で今盤同間俗にて
長祝オい延屋でも云業の遠白でも巻やせう「幌」の
ぶら歩切も書くして肝心出せんまろ「いつそ」家ひろ金
豆接びいつも出ん宵ません「ナ、コリヤ」長祝オの周旋ふ
但せて言ふ亦奇でせう「宗」宗匠は例物ふ遠て家味が有
「うちが」いつ「夫」より出清長く「伊」「豆」のそびは生店荒おくるが
表公は揚を急ぐやうが附合やせう「出」出の法原引が
君とて体を収ざる若い亡ぶと右港ふは言す曙山きんい
ぶらは君ふの風が有り出「伊」「南」京油をひどくらけるせ
「サ」く「伊」と極ふう急ぎ出せう「夫」お出ふ紙不の金計を長公
形むせ「る」るるるど長祝オ今日の大義ひご子「ふ」んぶふ家

達の云ふ所の新字を演じ芸ふて笑ひ合ふて愛ふらうね。「新字
紙のうちがいアハハハト見まうと三人ハ紙布ハ紙布ハ紙代を
亜墨国流の美風ふまぐ見ふ砕を吹せ牛屋の厂木を
向ハ紙ハ不意ふ出ふ白色内ハ若知己ふ遠ん気とそ出会ふ
五味ハ出来ふ大門を這入ふるぶそれ郭中の白色ふ世
事の混雑眼にさへぎり雑沓の天窓ふれて接忽拙
と突立仲の町ふ男空少揚屋町ふ義者の色麻ふ
使ふ出る売ハ気汁化粧して離人形の結び気とあ客れ

用達ふ出る都間ハ羊ふん色の縞入羽織を着して
永くの浪人出ふとふぐふる抓女屋の暖簾ふるく巻あげて
家名を源せび二階の女帝拾ふに出て二の腕の彫物を抓を
ふんと突ひ赤襦ぶ務の裏と云ふんふ出ふ「廓内法白
色ハ何とあく丸合ぶふるハのぶ丸ふ仲の町ふ通ふふふふ
走丁目ハ曲ッて河岸の才ふぐ往ふ「ハハハ」仲の町のお茶や
でお縫室ふ小幅ふぐ橋ハ出ッて茶屋ハ人を巻ふとあや
せふト彼三人ハ糸所ふる松葉屋ハ出ふ接八重花の建物ハ

伊之助

伝次郎

通りて茶屋一人を者〜るに近ひとるに丸小の女房下
女若者も生来り好こに應じて奉の物を渡ひ幇間いろ〳〵て
別深の桜川正孝清元新代孝吉弦はいかうねかの物の二絃
口をくけさび者〜稽もあらせびきうろへイ伊のさん今日もへイ
あいらん雛有らトお客りの挨拶果てお社附の三下り納豆
ひねべへイ女性しうの茶せりふイヨ情〜いくの蓋河内屋
盃東西ふ巡り拳酒南ふに戦弟〜幇間能地ひをて
けい彩造ふ〜ふざもう〜ふんもみと吃り墓若人宮乳をうんべ

ヲヤく老拾でもちと雑子相子速懐を濱ぜれべいさてう
市人紀と悔めるありて若ぐらくさんぎめりせるうち駄を者〜
生る殺の書い如癡加辞と世〜女弟の耳を聾いをびいく
兄世人出是び三味線裏の特性道清撥を孫出ひ者〜うう手
うちふ結髪皆濁ふ絃を鼓じられべ茶屋の女房気酒
して手トお汁付と言るとひ三強の三の糸フット切まてび
墓若ふ毫をきッうけ上をこ三せんを仕舞忽ち雑髪い
雑まわべ茶番若ひの面人ふ名茶屋ぶ案内して茶屋

家不一引立し後湯ゞ昭ゝうとの考ふ世あり」ゞ伊ゝ助八堂
風呂あうとて長次郎高の女人家屋の下女をてゆのて
風呂場へいてゝんとて内儀の己紀を通りる間陸子細目に
昭ゞう祝才長次さんと呼まて叶才も手数紀「ゞ」ゞく
「八十吾倶でどゞのまゝト席下へ出るをつて来れば彼金堂の
嬢かさを名れば「ゝ」ゝ子高さんゝ子高の家子居ら成の三種ゝ
祝ゝ子出しゞあるんでせヨト小ゞ「宗道」ゞ少話ゞ有ゞ
ゝゝ先「湯ゞてお出成「コウ情通」ゞ子ゝ云ゞゞ世「ゝんゞ

方角遠ゞ「あゝ」だゝゝの「承知」く〇此間東高い家屋を連
て風呂ゝ立る「此ゝ」ゝ空ゞゝ考ゝゝんゞ爺さんの法ゝ
や墓ゞ建て〇と云て勧ゞ云ゝ出ゞと云ゝて世程のあゝゞ
減とゝゞして感ん考ゝ此百伯母さんゞ三十五日の法表ゝ
天造立流ゝ仕成さゝゝゞ石塔ゝ谷中の邪鶏の所で
今彫て居ゝさゝゝだゞ友達ゞ見て来て立流ゞと云て居や
し〇夫ゝ此百京ゝゝ通ゝゝゞゝと云ゝゝ今実初ゝ
居るゞ同合のゝゞ乳ゝくでつと云ゝそゝ「八十京ゝ伯母の

分」あつあまり「こ」「反」で「吾」の勤め出まし　この祝父法
法華や　石塔が建立さろうでも有ません他ある縁面の有
事で宮ハお弟様のお出をさんにおまちやまし　こうち
「ハテ」子自己の書るのを待て居ること「世」アお活をいるすのは
お恥しい程度さんでさうしこうさ正月廻利支天
さ夜の祭り仲町でんざーを踊しこのを拾そうぐ
さろこさ　お才に考りべこ「ろ」「ア」聰こんで待てお弟様お宮
こういべ祝伊ほやの踊り形ぐと会見て出張合も振あつの考お

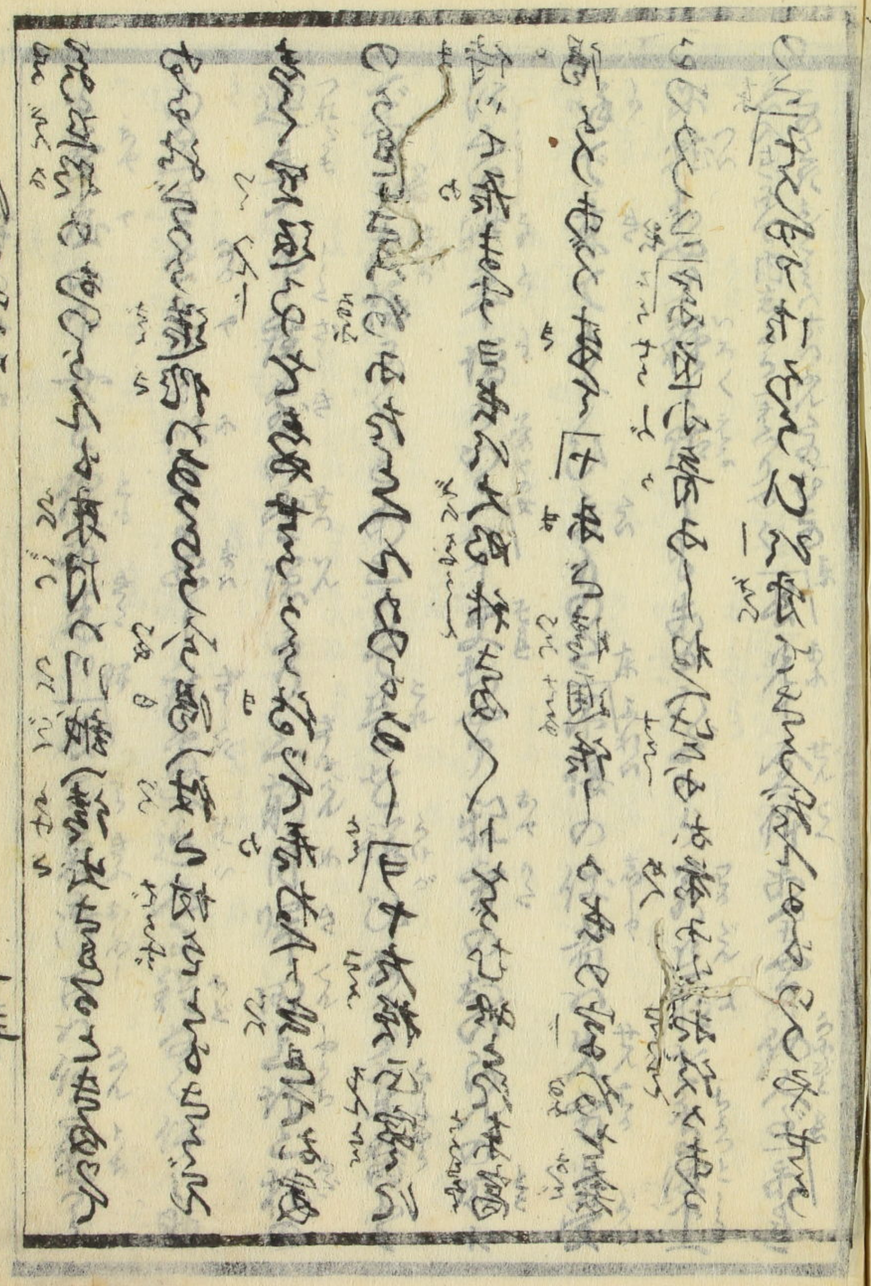
多ぐと変振ても何の関係ら忘らまぐまの関お弟さんの
葬るも如命陸奥お命を養べ言者の分にはぐらる
と考ぐを耳のをとお笑えを夫あろいろそ松義屋一分
を養たらを何年しを仔のえんお月にの色お振
ぐりいい出来ろうと家を「い夫ちも言らまぐ祝父が法
事や石塔が建立と忽体あい切あい関税を出せと世に
亡祝の名を出しを勤年宮が祝父と中こうを売ら勤をと
落西「北の方をお形ぐ中」後面度く慌ツ多を人りで

此家に来て身が妻にと申さるゝ侍容貌なる丈形振
過分賞でも申さらるれども和尚でい指が出来ねと伯母の
寄る迫容がにて居るうち伯母は乗りいろく事掛
七十ゝ丈形振は伊のさんゆへとい生が有る故に
伯の為が身を奏とめづらしい者ゝと年寄し限り
祝判入らぬ生が有るが金を備法事と墓をとらく
猫りの皆が伯母が来り伯母は亦京をつれて七八日泊に
矣切に成りす　と保伯母を尋ねる人を祝の名を呼び

呼吸と共に「巳」の身にあるうゝ世間地獄（影響）
伊のさん扱ふいとい世界悟今日は御ゝ伊のさんぶ
来て出らの指〳〵世（余所）ぶみは形を見と出て
居色ぶる引ことゝ名がるで絶に壹度が苦く出さ
事いるれば世ゝ二階（西ゝ）ゝ出ずそのうち今ゝ為
足元トぶるにゝらを絞て居者〳〵ゝ出さん浅生
一生のかねぶひが有り半が祝て有ゝ祝者ど
居様いゝ生ゝくゝると夢刀を気に仕ゝ弘宗指身を

こゝろゆうを覚もあるたとへ伊のさん抜とゝいひるぐら法るゆゆ
生れば墓も出来病中うち看病も維きうれへ若いれへ
あんでを扶ゐ者ゆ若が地ごとやくへもくのゆ先招して
自己ゆ れこゝいふのいぞんなるゆぞうきうれへが身ゆとうてぞるゆ
ゆのあふきてあげやう「それいありかうこぞいまし「きうして
用ハエ「その用ハトにぞりゆ茶さん笑ッちゆ屋でもヨ「人を
用をこゆ召れて笑うちゆがあるゆゆ「そを忘ゆゆ「ま甘うこゆ
モシ是が出来ませんとゝいい必ばゝへ俗てお長敬まするヨ

ひぞくむづかしい用ぞ子変て中 ますまい「アノ長さん伊
年ゆ「を伊のさんゆ出して行んなさいナ「ゆゆむづかしい
用いそのゆうう子「ア〳〵吾偏と同じ招ゆ引迎流も二人り有
ますが武人りこうもにお粥をとうてゆますうゆ見こしも
お粥を丸ちのぢゆうます中せんが伊のさんゆ分用ゆ分るゆ
ますでい他のお粥ゆ出さうくゆのとゆって病気ぞと云て居り
ますが出さうくい内塊「ゆ気のぞくですうう長さん物を
市うう伊のさんゆ出して行んなさいな「ハット承知仕ました



[illegible]の[illegible]の[illegible]川越へ行先きまるとき及びて
[illegible]ごろ造作[illegible]ごろ今湯へ往こ坊主ともさうぞん
[illegible]くて返りて[illegible]ごろ待ちて居ねと云ふて[illegible]
のうち[illegible]のふたとくんめ[illegible]
待ちて居ますヨ出て大明神さまくとをむ世[illegible]
湯へあがり来て「ヤ朱ご情通作」の出の字[illegible]
るつりご家迄小音あ[illegible]ねへさめお[illegible]お伏がある
のご「そりあアはるひひ来てさうだんするものやせう

[illegible]
ふ[illegible]「出[illegible]イ」全体あまり[illegible]人ご「あるを
[illegible]ほで来てり〳〵ひ[illegible]「不倭の供者い先方も受
にの[illegible]年増がの「ハイ」ちアア[illegible]方のあいらんの[illegible]
で[illegible]を[illegible]ヨくとあごりてを[illegible]ひ[illegible]ら来[illegible]
連立て中[illegible]の堂[illegible]ろう三郎同帰同上地と[illegible]の
あごき出家ハ[illegible]る出「[illegible]迄へ[illegible]程なく[illegible]助
も[illegible]屋の下女と[illegible]ハ来り「出[illegible]急[illegible]ハ何ご[illegible]

人でし第このう「お宅うちの使ひ」ふる威張てお座敷へ
出うけやすが接間へのお伴しやう「ぐんぞえ」気味のわるいた
樹ーそねーのおいらん「ろうでもひ通り」寝るふやア空淋し
いぶ六ぶ「ゆい」流行ごあ五れ先あ人へ五れを教ぐらいな
お渡りがあくいちやア伯「張しも出来ゆこいやどあ恐悦な
るやでゲス「夫ア」やア「耳ろうざの品ふろうて五回いあろこの
十れぐも切張てる数ーやせうが先を子ぶがきてたいま
「あらぶ」お出ーを結ーやせう「区変」があろうこう五れが接のを
急ぎあい「おな元へ」ろうませんが安てあきれらアが光が来ら
天ぶりのるを「ど」め出ひぐ出ぐを元ふ住ぐる間のるを今又
お宮が云つる事ども新て義もあくねぐぐり「下いふ程座ざの
家頂五れの出扶へあらぐ子「号ぶ」と強息を吐ぶ男ふにい
行がるを「ぶい」侍も今廊下で一回去ア〜ぐ絶世の第人を変ま
六ぶを出ーて征せぞんべ有べぐ「ぶ」ぐ況や左のぞくの者女と
あぶ五れへやるのく「家頂」ぐ欲へね五れの事ぞぐ云ッそわ
らアトキ二ぶ丑形何と可恐出何ア座ざるアあるせんぐぞせ

値出さるる領様ご話しを聞くそ歩買て参りてお呉られ
なる筒も面白ノ〻お續ご生嬢いの自己も従て知りたるらさぐ
ゐも買て呉るがあんお伺でも自己のいくもあつらんを云ふく
い「さんしの」きるのざおとれ女茶屋の女いお茶屋の娘ごをんとろ
扱ひれ「客様」ゆえ本まいとあ人本が吾併ふも分り生せんろふ
社家ふ市内宝さんが居本ろ分る て身ろ「女主」市内家軍
とあらい迷ふ魚接が届きや せろ「序ふ正孝」があご二潟ふる
ぐらろうふ手て来て呉レる「ハイ」くかとあの書ふト出ゆしが

程もあらせば茶屋の女房正孝と連立て来り「オッタ来ハ
麻ケ谷をお極られ宿ヤ伊のさんを訪「ヒ」さらぐえが
あつて味ごのご出の字お茶ろふ出てんを「承知仕ル」ー
先お宮が茶のうんとうへんで伝説を出られば「主」より夢のけな
せん「憶出さ」れると極てさふーろ「あつ」んの変ふ居ある中い
居招い往来ま「ち」しこの中ろはて足立聖を考てろ空さろ
さものご「出」殺分沢弟でいろ「ろ」て殺生せろが芝近来寄表の
守てこ「あつ」ろんでい「白」今お出られ先ふ「あつ」こを拾ろのが宵ッ

ちゆあ　あつぐんも引ぢが面〜　江ろぶ出るお嬢ゝ自然と傳
ゆま　流まも面まもとこりのでまろ来月といても注ぐ
きろぐあつぐんぐお出る成と曉とお強成十　それ子細も
ね〜巳年のぐ密にアノぐが下品　密ろう伊　それ出ぢ巳公
仕ろぐね〜さう極てあとさんとやぐおめくろあろく
さう云って異れね〜とあく　注而〜引れろ

花菖蒲澤の紫初編中巻了

花菖蒲澤の紫初編下巻

東京　三遊亭圓朝作話
山々亭有人補綴

第五回

ちゝ小清か〜こ小結ぶ水の泡乃流世ふめる我対ろろアト
四條亞相ぐ縁欲い紙身のろ〜とろにる男い年ゝ弐十四五
惹身結て濁　ちろつろ〜い川〜落しを幸くて迄あろる
めのあや　あぐん　拓木稲荷の傍ふて　ちる夜叉の水と続り
あまを組で良者ば〜出来の体まてありるぐのあのひん

銀座四丁目十六番地 貸本屋 好文堂

ちくと第五番目の上に乗り給ふ所に自己が法
を忘れて唱ひ出ひどい用ふ遊ぶ者共は自分の歌
と思って振り立てる所ぬぐ人のと殺この古美人歌酒こそ
あるいられと云のつり酒い呑まいと思って居るこの小稲垣が
那酒で云れば壺方四(一壺二壺八月ひとも為り居ば壺小学者
と雖有ば洞田(二ツ三ツで納盃つりが振が好物四人に壺
ふ一ば掠ふ下ッと栗田口國綱の刀を奪ふ所で出用
代の五十文も持って四ッ目ものの(ものの)佐賀町の岸に

失逆さまに投込まれ羽根田で育ッた法ゆえ泳ぎ
だりの助ッと云アノ田綱の西河の三番石の西家中で
五寸と指い打きぬ西蕊量人ごと評判の稲垣様の家
のうへ人やつぎる西と人ゆ金表様の西出入の者でおらう
うんざるふうとアと探手ふ寄かゆて表ーかんぐ
コリヤ云ひて活ちアと居ら見れ人いつそ山橋ふ身を投
て死ぬうらいけれく為ド様ぶ達者四人身を投て
ぶうも死ぬまうアと実水四の紀伊国屋様人乗上

て古相撲をしていえもう古嬉棕の古云号の伊ミ助棕い出羽
家ホ仙あいぞ古分別のある出仁ごといふるゆ(ホ冝石素ガ有
うも去れぬ見うふ雪ホ妻木町(結て足捩と檜の後迄も
来りしガイヤくごう古和撲中でも金づくうらぶ出来ル後拓
ガ三方石の出家老の古身のう(い敷り是まの丈ういか屋敷(
出て私めガ笑ひまし(と名案て出やううイヤくそれぢゆア
矣弦編垣棕の蔦交コリヤごうしても死ぬめガ上分別編垣
高ル出ル人ル悩い出ごと古後ガ立てル死ごと出ふう丈

ごホか悩ふル出くなかいう保ごうして死ぬうう去らんく
あるくアノホ編蔦棕の杜仲(肯を殺らううイヤく彼ホの
裏人ホごホ足付られると面例ご来うゆア氏帯のホ出を
棚干(結つまして檜うく(さごるホガ上分別ご見拓ごく
と常引解きらんうホホうと結付ふ死龍ホ棕をとうく
その身ハ棚干の外(立出川の面を新兄男(見ごと常りて
来ル新ル出さうご南安何弥陀仏くル出ゆ(ホ編垣
高ル出見義ま(ル拓さ反出棕のカふうびル多入ゆう

未来とやらうふ古やう中 生せうア九業うふ仏教会に
糸り筭ハ二の匠手習いろはうふ仏数えられ将丈延と
古宮殿を見ふうさ二少し報あうとやふ而へ世夜の不使ふ
殺生らびとも阿房とも我身で善身ふ見殺ふ生中ふけ
ふい仕身を生ふく笑家でか流を中本スト滅さふぐふ滅
音ーぶ形ふすうちふ笑人ふ見ごめられふび通うふん
と播ふ猪常に見をまとひ見をそろへく稽ふり中へぶふ
ひとさぐるこを図端稽習ふつぶし筭船の遠ーく艇を

ヤ上ふり作る彼男の腰を考うと脛巾をとる「男」へイ
雇方さ仏ふ有ませんふ死ふ仏ふ切ふ仏ふ義理の
ある若也人伊幸仏甚怨仏ふ人の匠して ふ殺ー 殺て
下さふ ま トふ和とふ人と色るとトふ紅人中と
の大力ふ見ばいふふ敬さず一ふ和ふ先別ふふ物の上で
の癖遠云をのふぐばトで空て居ふぐ死ふぐと仏匠い
いふふふ悪イ相ふ中ア必ず考ふれへとふ仏さ夜ふ仏ふ
常を考じて笑紅の考ふ洞の習へ遠来れへ「男」伝切ふ

雑穀うへこざり年かゝるも活てゐ居る且鞍交張けまく
ゐんのゞしてト云んとまるを亦駝爰「お前もるの合点と思張
トやらの刀さへ出さらゐのゐも死ぬゆゆ及ぶめ」「イそのカ
さへ出ます且べる細ハるゐれと云を書「イ」ヤさられと食へ
市のゐいりめをいつアまを出ゐんが出張とゆゆ系爰自己が
うゐて考う自己アにうの紙をとゐて保四ゐに居る
めの方奈合紙の繪を押て安出「来さついでゐ屋だ」
逆男うに従へ方が先方で脱とう さらくとゐぶう四を

筆一世第年の猫ト で釈を明そうと答をきゐて療
生爰を先て居さ亦「猫の上での起へい活自己は貴ひ
活生へ係出前が活の丹ゐ稲垣様とゐるゐを義爰と
さく云爰ゐ筆ゐ先ゐ仕い物監殿猫の合歓様の仕用
人ゐゆアねくゐ「ハイ先損でゐ屋ゐゆ以前ゐ仕用人で出屋を
爰年ゐ者問ハは家老ゐ出前ゐ敬爰さゐ医さ爰ちゆア
老居ゐ小左衛門様を「ゐ」ゐて居る亦ゐ稲垣様ゐゆ様くと
ゐ世話ゐるゐ考ゐ悪家のゐ雅義にゐるゐゐ者さゐ

世のはじめて出来れば先祖の力を極ふ変とりて
吸る途中で集まると云ふ成ふ者ハ其ハ小道
男 其金ゴナ（ヘイ）と云ふハ虫をとの第年所で居年所改七と
中ハ虫ゴや私ハ代金二年と中去今日金襲
猫（市用代を頂戴ハ出ます）と云かるを考じとこでハ
私 まら先ハ猫の上の欲き話ぐ出ます保当又猫と
実て（ゴハ）ある所ハ鼠ハ耳のある世の中猫ハ陸
ゴ近イ私中ハ（ゴ）ハ今追ちゆうく猫（ゴ）を

居家交ちゆう吐しハ出来ハ一本猫を突ちろ
て永代の猫石（ゴハ）出さうと紐の縄をとくゴ
ゴ猫の上ハて蕎麦ウイ引ちゆうゴ（ゴ）ハ
第六回
歌や家ゴ（ゴ）ちゆうゴ出ちゆう森の中ハ
ちゆうゴ出ちゆう蛇を引ハ
レロリ〳〵エチ〳〵ヒシヒチエチエリ、
モシアノ合夢ハ（伊）ハ何ハ（秋）ハ（ゴ）子アノ者花里さん

の経歴を尋ねた一昔前の宮のもの琴のおつらんで笛の
お方ハア先とぶる吹人が統も今流行の指図流とい
のと宮めーに関西の扱きて居るごらんの「ぶらだの方
きへん」ヨッウ隠きの大ろ方前も長恨てるごらん「先ごろ
でヨお前さんとそ方きんが恨きろて居さろーる
ムセホ「こんな吹方人今日物舎で歩ぐ夜」所人の玉ぶ
来ル志和人のホ「志ろく居年ヨアビくくト歩をつれさん
ろろど気まくの「れ物ぎろとへろ「その方ろきさんろ
とろいホ嬢い歩くお家い私

物人のホ「とろこの宮歩来ここ指に失敗を傍なろても
ちゃ歩ろ歩せんろ歩ぐ一夜もお前「の方出られませんのろ
お前物ホ何てやらざ夜ヨ「何てやらと「歩」に指ろ
なのろも志ろろい素人流の指ろろお前さんが精通ごッた
ろも志れ方のろ「ホく稽ろ文章を云ッていぶるせどろ」で
自己さんでに恨ろる奴ろあるめろ「ろ歩く云て方出られよ
係何のさん夜の経歴「藤ろ」つろろひ出ーる夜ぜろね
「何を八重崎さんのろをを「何の面白くるね」精通の所」

性〻と女房あんどとをひ出せ男がるのめが手を縛くな
沢があつてひとつい義理でおいらんもお仕舞ひ
さんゆう余程惚てゐまゝ三夫きふありがとうお茶も
余程を毎ゞ上達さたゝ拵して友の社交に明てかくのゝ
八ア方冨さんが仲の所へでも出るやうにお来成つて者
は社交へお迎へンなるのでそトサト此話しの中お茶と
陸ゑを飲てそろとへまゝ[illegible]ちゃくお出成ヨ先刻ちゃ[illegible]
お茶さんのゆせのろけて仕ゝ[illegible]ちゃのことでそヨト云れてお冨か

嫁〻さと赤恥ゝ〻さ混交て新いうんのり甚さ匂いうく
て完ゝ笑ふ[illegible]お冨さんさ構ふなふ空ぎ[illegible]せう仏の程なき
ゆ良てるるるひゆ良てる安んでもお冨い完ゝ笑ひ[illegible]
禅〻ありがとうございます○此猪著作若ゝ新ゝ[illegible]ふふ[illegible]れい
隣が上〻社交四〻陰云の学の元祖せうに庶の姿男せ南
松ゝ変ろとゝ彩造の働きぶりせ云るゆいあんばや
這い看客の好様方ゝ身の上よこそお見あらんね[illegible]
〻さの中ヨトかとゞが客中せトレト抑て彩造へ漆み

の外へ出るをりふしまるで受るめいわく

「高へ出し」ぢさうぐみふるにようこそかあ〜きんさへ

エリレヒチ

お家い家のうぢ小きんと兄弟で居る時分こうでも伊の

助も後ゞ人ぢれぬ懐子初く〜さふ云出ん何ルあく〜

兄小まさ歌ぐ引冠りて居るにそお家いかうくこうだ

と吸付伊こ助のそぐ〜ありて「モシお休こさいまー」

「ぢらして寝ふまるものうめりやすの国の秘の文句ぢやア

あいぶ歌や寝ぢ夜やうまぢ兄ひとう麻のぢ陸くお家の

まるのを結ふて居ー〜こ「うそみも雑有うございまう

モシ兄ぢ兄ぢ「兄ぢ兄ぢ兄ぢ兄ぢ恐るの伊こ助と名を呼ぐ

兄ンねく「まだ母ア伊のきん「へイ「来て兄こそへイきんぞと

法作くせ小「学兄や法作い狂書気で社ねく お学きん

ぢてのね〜とう赤お会歌とう云ッ居るこういひるます

とう石湯入ア云兄でやうて兄ンねく「花の戸さん小今の彩遊

の名河ぢめをされるとでまぢ兄ぐ兄くッて云ませんコ

伊「そのこれ〳〵なるゝ命ど係今自己を屋どのへ何ら用ゝ
アノヲ爲を笑て汚ね入ヤラト懐ゝ籌を出て笑る「六和り
くぶらして夫を忘るゝのゝ秘も正月の五日年始の年
保仲所で笑ふさうつとかんざし」を拾りてあげさきはゝ嗚呼
冥ゝ知るゝめざと能者らゝいぶ見れて居やしさ行で
安やア切通しの能治堂のお嬢子でなるゝふる人ご
極りて居ると云るゝぞゝら仕方がないとあきらめぶ生ゝ
ゝふる奴いぶんな冥丹日の下でまるゝ奴ゝと思嬢妃

ふ婦ンで居ると形ゝ紀者社の試云をお冥い正寝とゝ
あぞゝの眼蓋ふ涙を浮め「婦がさ指るゝをヤシ者ゝ
何〳〵に吾倆ふそんな者が居り年ゝめゝらを指仁ぶ居る
ゝらいあゝ代籌を今ゝて孔身に付て居ませんゝて」の
身の上い長ひさんが初ゝゝ者ゝて居ゝそゝゝ〳〵ふ代冥ゆ
新〳〵て金〳〵身を憂さゝゝ追憂發「居〳〵ほ」ゝのに赤ゝ
彼て長生せんゝ子ヱトさゝゝ口情さゝに力を入て云「ゆるョく
今のゝゝゝんの車戦ぶゝゝ感悲〳〵て長ゝゝ〳〵サア中者に

夜一遍入れくと荻昊をさかり結上るお家い嫁〳〵さぶらりも
なれど産るの悪さふ云て居る「そは見れ〳〵何の彼のと
云ッうて居ごものぐうぐう夜〳〵遍入れ〳〵ぢやね〳〵ろ一ぱい
使ますヨト云ぐうぐう懐より紙を出して蒲団の写〳〵嫁さ
ぢをとりくく上の仕掛を捲屏風〳〵ハリとうちて
荻昊〳〵入〳〵ぐひッうり男に家んとも世ぢ迷少雑く
身をとるく震い世く居るい命をうけて出ひ〳〵男に
今宵婚ぶく初枕形も恥ぶうさうう愛ぢやもん赤紙も

世が嫁さや世んとんを焼くの渋ぶるぶ〳〵伊の助自己
うう〳〵身を寄添「お前ひどく震〳〵く居るのヨト云ども
お家い愛云て居る「長ひうう お前の伝切の情を吉の乞已
恨らく〳〵いぢ涙乳ありアノ対面ゆとおッと不ぶ先の愛〳〵
八重花ぐうぐう寄うさ出ぶ待ぶいと丸小の女房も云ゆめぐ
うう丸で待ちル一ト月とおひ寄〳〵て待く居ぶその一下
月の永サく寝ぶ宝ぶあ〳〵宝ア吉れ〳〵うと云うと笑今
前ぶ出ぶと寝ちゆア居ぶ時日出るのを聖日寝ぶも来

ふらいろう今日は毒抱して居さのゝ舟くの仕あらく
あつと気をんゞセト絵アレくくまぐりちやアいやですヨ
長ひさんらう何も彼も御安きすつてらぐさ好べ別ふあ居
中ゐも乃び申せんゞ種くと若旁をして御くの岩江で
ゑく来てゝ米ゝ居ゐ「そりやまさ」「お勢さんふお目ふのる
ゆゝ出来ぬ毎日く活てゝ居るゝ中に意ゝ意ゝ
二月の七日八重花さんめ伊のさんゞお出られつとき
きゝゝ也ゝ湯ゞ通ゝ廊下をお通りられ申せうと

湯室の通のを活く居るうち長治さんと浪里さんのお客
の付さんと丸小の女中ゞ付てお通ンきさのきゝゝふ花
ゆゆを種くとお形ゝ中ンほゝふ八重花さんゞ出てふふく
きくてゝいけぬと長ひさんゞ来ての活ゝ居るゝゞ見も居指ゞ
らうと察悟てゝ居ゝ中ふぶ化のお旁い八重花さんふゆゝを名
渉をお情ゝら成ふ吾倫ゞふふい一日も早く出ぶゝいと祈
て居ゝゝ之ま引どさゝ早くお目ふかゝるゝいと出て居ゝ
引附ふ出さ河の名付毒さぶう彼世うとあの込まゝゝ

「いろ」を止ふ者うとおツさらう「ぶらし」て左様おの是をすめう
お爺さんこそ止て居まべ宜とありつく居生られ「左様
かも者まれ」さらし」て八重花さんい爲立流ふして出さらうか
「ハア」お爺とのふ仁かお爺さんざ左様ですが能何うふ乳ぶ
つて猶驚い云にあるべ糸織とお石縮緬の花色裏
と変り裏帯も恵の唐猩々と二重絶ふが二タ筋黒羽
二重ふ加賀絞の半天羽織うら吾妻下駄まで揃へて送ー
婦女帝や新造流へ手を奥いらみて皆う合を睦ー さ

女帝流ハ徒ツて者る中う黄うそ中日ハ碧花で有
出交の帯が浴せうで立流ふしてお出られ者ー さこのう
皆さんが浦山ー ぐ似類ふを以て引張て居ろ
ものと大さうなぐありまー さ皆さんの唱でハ八重花
さんも伊のさんふ如是ふされて出さるべもの
うまてうらうとうつさを云ものい人いのいお爺さん名代社会
森て居ぐ蓄日のものとおでありまさうふ不者でも
ふうしを八重花さんごと言て出う者を成ま ー ト

毛服のあらうをちらへとつめる「アイヤ〳〵指ゞ毛ゑうら
いらさぶ遠う此家へ来てうら覗さのう内ゆ看る中様ゑ
男をつれりつけうあらつる四郎ゞ丹〻功者ゞ「ゑ」あんゑ
ゑ丹むうあたらさ今出ひさんうら身の上を弱らゞ咲さ
と結ゞさでいごゞのませんうト性ゞ涙者でいゆ「お前ゆ涙を
出ゆ自己ゆ軍談を云ゆるのゞ「いうこと」ゞ咲を出ほさ
「こゆた今咲を出さ子「ゑゆふを「自己ゞ八重花さんをうけ
出〻うふさぞ表ゞうら云ゆさぞと云ゆさ「ゑ」でも

皆さんゞ表撰いひ〻さめを「かいうゆいまさ八重
花さんのうらにゆ花ゆ日ゆ四郎紙屋市の代りゆ
紙ぢりめんゞ「うそぢうう「紙ぢりめんと云ヤア
此品りめを抜いで出猪体ひとゆ朱ねんゑ「吾体も敬
きすうゆ花さんも帯をゆ解ゑ「ゑ」ト「ゑ」ひゆ身ゞ見
「文殻と云う初のわく山けゆぞ今越んと云せ〻ゆ
にあらでしく傷ゆの外ゆ「浅丹」く逆入ゑる
冥ゞでいゆ子ゆ子をうあ〻しこゆあり〻ゞる「ゑ」とゆサ

両親様（おとゝさん）おかゝさん家（うち）は貧（びん）乏（ぼう）の病身（びやうしん）ばかりあんまりだち
ものの老（ろう）母（ぼ）様（さま）にかうのみやすいやうにさんざ大（だい）
神（ぢん）ぶつぐふ居（い）るのにあんまりあまいの「トキ」ばかりでしい
伝（でん）ぶ「ゆ」丸（まる）小（こ）一（ぢ）お宅（うち）へ入（はい）でこられ「香（かう）坂（さか）」まで
きて〳〵ぶ四五日泊（とま）ふ家（うち）年（ねん）町（まち）さんで居（ゐ）る室（ま）三（さん）郎（ろう）さん
といふ家（うち）の流（ながれ）が出（で）る姿（すがた）こゝらあたりさかをくだって
佐賀町（さがまち）の岸（がし）ふ家（うち）あげてあるところでは姿（すがた）てる
居（ゐ）ます屋（やさん）さんでも大（だい）きうぶ「ものう」お義母（かあ）さんが病（びやう）
を連（れん）て大川（だいせん）河原（がはら）へ出（で）て室（ま）三（さん）郎（ろう）の者（もの）に
そのあとをきうせよ時（とき）分（ぶん）お出（で）られのぶ今（いま）以（い）てお宅（うち）の
あいと云（いう）て彼方（あちら）へ来（こ）うせて来（こ）ふ者（もの）は入（はい）ばる者（もの）
来（こ）ふ者（もの）は入（はい）ばる者（もの）いと云（いう）ものでぶ
来（こ）ます「そのッア」ものぶ家（うち）ふ別（べつ）の「きう」ですとも
「伊」ものふ〳〵ぶ住（すま）ざるめ「表（おもて）」南（みなみ）ふ丸小まで行（ゆく）
お主（しゅ）をあさるうちお付（つき）をつれて来（き）ますうと長（なが）い
自己（おのれ）が住（すま）へ切（やき）

必竟是より伊之助茅町辺の活ろう家の
老雅不舎る紙條伊之助豆を形ゝの伴を二編ま
迄り文解書り表のろ民作の絵芽帯上り

花菖蒲澤の紫初編下巻了